栃木県中学校長会会報

## 教育課程と学校経営

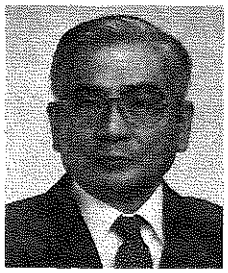
栃木県中学校長会副会長
宇都宮市立陽北中学校長
福　冨　徳　治

今回の中学校学習指導要領の改訂においては、教育内容を一層精選するとともに、選択履修の幅の拡大などを行うため、授業時数の示し方や基準の大幅な弾力化を図っている。学校は、地域や生徒の実態等を十分考慮して創意と工夫を生かすように教育課程の編成を行うようになっている。

例えば、選択・自己決定・自己責任の能力の育成等が教育課程の編成や授業時においても、これまで以上に検討する必要があろう。情報化社会の中で生きる子どもたちは、選択する能力や自己決定の能力を獲得することが切実な課題の一つである。これに対し、これまでの学校教育の基本的な在り方では、学習者自身に選択を求めたり、体験させたりする活動は、教育課程全体から見ると限られたものであることは否定できない。また、選択や決定を自己の責任と結びつけてとらえ、自己が責任をとる能力も、これからの社会で生活するうえでますます重要であると思う。

選択教科等の選択の能力等を育てるためには、まず各教科の授業の展開が基本であり、主体的に学ばせる教育活動を重視し、生徒に基礎・基本を十分身につけさせると共に、一人ひとりの興味・関心、意欲、態度を養うことを十分考慮し、生涯学習の基盤づくりをする工夫が必要である。

そのためには、中学入学時から、教科指導も2年次で選択できる体制づくりをし、さらに、学級活動、学校行事でも連帯感を育成することを強化するなど、本質的な人格づくりが重要と考える。したがって、学年4クラスの学級が同じ4クラスでは、従来通りで、改訂の意味が充足しない。生徒の実態から、多くのコースの設定が必要である。そのためにも教員の定数増など新教育課程の編成には条件整備が重要な課題と考える。今後も新教育課程の充実のため、本会をはじめ全日中などにも働きかけ、充実を図りたいと考えている。



## 校長三断

栃木県中学校長会副会長
黒磯市立黒磯中学校長
八木澤　　勝

校長になってから今日まで、それなりの覚悟をもって学校運営を進めてきたつもりですが、その間のさまざまな経験から、校長として大切な要件といったものを、最近とみに痛感するようになりました。医者三診の例にならい、三つにまとめて述べてみたいと思います。

まず一つめは“予断”ということです。現代社会は動きがめまぐるしく、まさに予断を許さない感があります。わけても、政治、経済の予測のむずかしさは折紙つきです。程度の差こそあれ、学校教育も決して例外ではありません。新学習指導要領の全面実施を目前にして、学校週5日制が新たに浮上し、どこの学校でも学校行事の大幅な見直しなど、その対応におおわらわです。校長がこれからの学校教育にどのような見通しを立てているのか。今ほど校長に職員の期待が寄せられているときはありません。

二つめは“判断”です。事務的な内容ならまだしも、内容が複雑な場合は、校長の判断を求められても、即答できないことが割と多いものです。それは情報とか資料の不足によるのがほとんどです。ふだんから新聞、雑誌などに目を通しておくことはもちろんですが、地域や保護者の口コミにまで範囲を広げて、情報収集に努める必要性を強く感じます。

三つめは“決断”です。校長は学校の最高責任者として、何事につけ決断を迫られるのは当然ですが、いろいろなケースに遭遇してみて、決断をくだすタイミングのむずかしさを思い知らされます。決断が早すぎて悔いを残すこともありますし、逆に決断が遅いと、職員の目には優柔不断と映りかねません。

学校教育の意義が改めて問い直されようとしている折から、校長の責務はますます増大することが予想されます。私たち校長は、文字どおり不退転の決意で事に処することになりそうです。

## 心豊かな日本人の育成を

栃木県中学校長会副会長
足利市立第三中学校長
茂　呂　保　雄

まずは新春を寿ぐとともに、平成4年6月開催の関ブロ栃木大会に向けて各地区会員各位はじめ開催地宇都宮地区会員各位のご精進ご尽力に対してまずは慎んで敬意と感謝の念を表したい。

さてこの大会においても心の教育が全体のテーマになっているが、その必要性が叫ばれてから久しい。この心の教育について今回の学習指導要領改訂では基本方針の第一に掲げられ、「真理を求める心や自然を愛し、美しいものや崇高なものに感動する心を育てる。」等7項目が示されている。(中学校指導書教育課程一般編 平成元年7月文部省p.4）これはこれとして、私は心の教育についてもう一つ学校経営上配慮したいと思うことがある。それは端的に言えば「社会を支える心」あるいは「集団を支える心」とも言うべき心を育てることに配慮したいということである。

識者によれば今後の社会が①個性化②分権化③自由化④脱イデオロギー化⑤国際化⑥人間化の方向で変化すると言われているが、現実の社会変化を見ても、日本の場合でも世界的視野においてもそのように変化していると考えられるし、さらに自由化・個性化の進展は人間に素晴らしい恩恵を与えつつも、その陰の面として退廃的なミーイズムの蔓延をきたし、人間の孤立化や社会の解体をもたらす危険すら予測されるという指摘もあり、社会の動きの中にはこれも本当だと思わせる現象、例えば「個食」「個視」「個住」とかあるいは「コクーン」「カプセル人間」等既にいくつもの兆候的現象が見られる。とすれば現在は人間の孤立化や社会の解体を防ぐ心の教育を真剣に考えるべき時であり、前記指導書の7項目も「人間的接触の体験を多くし、その体験を通して自他を尊重する心・欲望をおさえる心・集団生活のための最低の規律を守る心」等「社会を支える心」の育成を中核に展開してもよい時期だと考えている。かような意味でも栃木大会の成功を衷心より祈念している。

## 第42回全日本中学校長会研究協議会旭川大会に参加して

栃木県中学校長会事務局長
宇都宮市立若松原中学校長
鈴　村　　元

第42回全日中大会が平成3年9月11日(木)、12日(金)の両日にわたり、豊かな大自然と限りない可能性を秘めた北海道(旭川)において盛大に開催され、本県からも37名の中学校長が参加した。

「心豊かでたくましい日本人を育てる中学校教育」の大会主題に基づいた全体協議会では、年に4万人を越す50日以上の学校ぎらい生徒を問題とし、その改善の手だてとして、①学業に関する個別指導の充実、②人間関係の拡大のための学校行事・クラブ・部活動の活性化、③学校生活の他律から自律への伸長、④悩みの受容を図るための個別面接の実践等が活発に協議された。

文部省説明では、福島忠彦中学校課長から、①学校週5日制への展望（平成4年度からとりあえず月1日、研究学校3～4日の休日）、②指導要録の個人情報開示問題と保管管理（指導の記録は5年保管）、③情報教育（平成6年度にパソコン2人に1台配置）、④学校不適応生徒（最重点施策、適応指導教室、家庭訪問員の設置）、⑤高校入試方法の改善（入試改善会議の発足）、⑥教職員定数（平成3年度で定数計画終了、今後は教育課程、登校拒否で対応）、⑦給与（校長 12％→16％の管理職手当を折衝）等の回答がなされた。

記念講演では、ＮＨＫ特集「鶴になった男」で有名な、釧路市丹頂鶴自然公園長高橋良治先生の『丹頂の四季』について叙情あふれるスライドをまじえて話が展開された。特に高橋先生の鶴と寝起きを共にし、愛情の通い合う生活、そして鶴の夫婦愛等、聴衆を感動に引き込んでしまった。

旭川大会の成功を見る時、個性を生かした教育課程の編成及び実施に係わる内容・方法の協議、とりわけ新しい学力観、選択履修幅の拡大、登校拒否の予防対策、心の教育の充実など、多くの課題について実のある研究協議がなされたものと考える。最後に、全道一致の協力に感謝したい。



**研究学校発表概要**

## 心豊かに明るくたくましく生きる生徒の育成
### ―勤労生産学習を通して―

西方村立西方中学校長
春　山　英　男

本校は、平成2年・3年の2か年間にわたり、文部省及び西方村教育委員会の指定を受け。勤労生産学習の研究を推進してまいりました。

平成3年10月15日には、県内外から多数の先生方の参加をいただき、公開研究発表会を実施できましたことに対し、この紙面をお借りいたしまして御礼申し上げます。

1　本校における勤労生産学習の考え方

勤労生産学習は農作物の栽培を中心とした実践活動を通して、人間性豊かな生徒の育成を図ろうとするものである。そこで、本校では農作物の栽培活動を中核に位置づけた。作物の栽培は長期間にわたる一方、常時作物の生育に応じた適切な手入れが必要である。この間、生徒は自然と触れ合い、植物の生育に立ち合う体験とともに、働く尊さや生産の喜びを体験するものと思われる。

また、自ら考え、決断し実行しなければならない体験や仲間と協力して作業する体験、相手の立場に立って考える体験、思いやりの体験などを積むであろう。こうした体験を通して、豊かな心と自主的、実践的な態度を育て、さらに人間としての生き方について自覚を深めることができると考えた。

次に、栽培活動を相互に補充・深化させる教育活動として、道徳・特別活動・各教科の学習を位置づけ、その関連を図ることにした。

道徳においては、主に道徳の時間において、栽培活動に深くかかわる自然愛、勤労の尊さ、奉仕の精神、主体性、強い意志、社会性、生きがいなどの道徳的実践力を育て、人間としての生き方についての自覚を深めることができるようにする。

特別活動においては、栽培活動と関連のある諸活動を工夫し、栽培活動で培われた自主的・実践的な態度をより確かなものに育てる。

教科指導においては、教科の特性に応じて栽培活動と関連を図った授業を工夫し、生徒一人ひとりが主体的に学習に取り組む態度を育てる。

2　研究の実際（栽培活動）

(1)　活動のねらい

①　学校の実態に応じた栽培活動を工夫し、自然に親しみながら農作物への理解と関心を深め、栽培の技術を習得するとともに、勤労と奉仕の大切さを体得させ、進んで働く態度を育てる。

②　栽培作物の選択から生産物の利用まで生徒が自ら実践する栽培活動をすることにより、自ら課題を発見し、自ら解決方法を工夫し、しかも粘り強くやり遂げる自主的・実践的態度を育てる。

③　一人ひとりに活動の場があるとともに、多様な人間関係の中で勤労体験のできる栽培活動を工夫し、互いに認め合い、協力し合って活動する集団の一員としての態度を育てる。

(2)　活動の内容

①　班農園活動……学年・学級の枠を越えた異年齢集団による栽培体験

②　学級農園活動……学年・学級集団による栽培体験

③　稲作体験活動……全校生による同一勤労体験

④　園芸活動……趣味を同じくする集団による草花栽培体験

(3)　活動時間の日課表・週プロへの位置づけ

①　学年・学級の計画実践の日……月曜日第6校時（学校裁量の時間）

②　班農園活動の日……第2・第4月曜日放課後（月曜日放課後部活動中止）

③　学級農園活動の日……金曜日第6校時（学校裁量の時間）

④　園芸活動（クラブ活動）……水曜日第5校時

⑤　稲作体験活動……学校行事として実施

(4)　活動用地

班農園活動畑20a 、学級農園活動畑10a 、稲作体験活動水田20a 、園芸活動校地花壇

以上、ささやかな研究実践の一端を紹介いたしました。これからも、心豊かに明るくたくましく生きる生徒の育成を目指し、継続研究をすすめていきたいと思います。

# 自己実現を目指し、ともによりよく生きる生徒の育成

## ー学級と家庭・地域の連携を密にしてー

益子町立七井中学校長
山　川　信　栄

1　研究主題について

(1)　主題の受け止め方

生徒一人ひとりが日常生活に生きがいをもち、自己の可能性を最大限に発揮して目的を達成し成就感や満足感を味わい、明るく、伸び伸びと活動できることを「自己実現できる生徒の姿」としてとらえた。そして、自己実現を可能にする資質や能力・態度を育成するための指導・援助について研究し、実践することが主題に迫ることであると考えた。

(2)　自己指導能力の育成

将来において社会的に自己実現できるような資質・態度を形成していくためには、個々の生徒に「自己指導能力」を育成することであると考えられる。

自己指導能力は、生徒自身が日常生活の場でいろいろな経験を積み重ねながら、①　自己存在感の確立（自己の存在を強く認識し、自信をもって新たな目標に向かって挑戦する意欲）②　共感的人間関係の育成（相手を認め、ともに生活を高め合う実践力）　③　自己決定力の育成（責任ある生活経験を通して、自らの行動を決断し、実行する態度）　をすることであり、これを研究の３視点として研究を進めることとした。

2　研究の構想

研究課題を解明するには、「いきいき栃木っ子３あい運動」の趣旨を生かし、新学習指導要領の精神を踏まえ、教育活動全般にわたって研究実践することとした。

そこで、研究組織に、①　教科・道徳研究部　②　特別活動研究部　③　家庭・地域連携研究部　の３本の柱を立てて推進し、研究の基盤に「学級づくり」を中心に据え、教師自身が新しい指導観に立って研究に取り組むことが大切であると考えた。

3　研究の実践

(1)　教科・道徳研究部

生徒一人ひとりが意欲をもって学習にのぞむ態度を育成するとともに、人間としての生き方についての自覚を深めることを研究課題として、学習指導の工夫（分かる授業、評価の仕方）や道徳教育の充実に取り組んだ。

(2)　特別活動研究部

自己の可能性に向かって、意欲的に実践できる生徒の育成を目指し、学級づくりの工夫や学校行事等への積極的参加、基本的な生活習慣の育成などを研究内容として実践した。

(3)　家庭・地域連携研究部

研究課題に迫るためには、学校教育の場のみでなく、学校と家庭・地域社会がそれぞれの立場で教育機能を発揮し、相互に連携し、一体となって教育活動を展開することであると考えた。

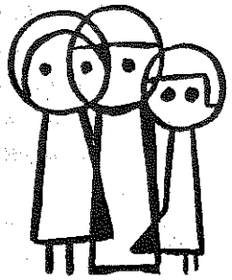
そこで、父母との懇談会や高齢者学級との交流、各種の広報活動などの試みを通して連携を深めることに努めた。

4　校則見直しへの取り組み

研究推進校の指定を契機に、基本的生活習慣育成の基盤となる校則を見直すこととした。研究組織とは別に「校則検討委員会」を設置し、「生徒の自主性や判断力を尊重する」などの基本方針に沿って、生徒・保護者・教師の三者が一体となって検討し、慎重に進めてきた。その結果、頭髪の自由化等を盛り込んだ新しい「学校生活のきまり」を作り、自己実現を図るとともに、よりよい校風づくりに邁進しているところである。

5　研究の成果と今後の課題

本研究は、教育目標を具現化し、生徒一人ひとりが多様化する社会に対応できるための自己指導能力を培うための指導・援助をすることであった。生徒をたくましい人間に育てたいと願うならば、先ずもって、教師自らが変容することの大切さを学んだ次第である。





# 学校と家庭の連携を強めて豊かな心を育てる道徳教育

栃木市立栃木東中学校長
巻　島　秀　世

本校は、平成元・２・３年の３か年にわたり、文部省及び栃木市教育委員会の指定を受け、道徳教育推進校（学家連携）として研究を推進してきた。以下はその概要である。

1　主題と研究仮設

本校では豊かな心を、新学習指導要領の趣旨を生かし、次のようにとらえた。①　自分自身を真剣に見つめる心　②　他の人をやさしく思いやる心　③　美しいものや崇高なものに素直に感動する心　④　進んで公共のために尽くそうとする開かれた心

これらは総合すると道徳的実践力に他ならない。そこで、サブテーマを「道徳の授業を核にして、道徳的実践力を育てる」とし、父母や地域とのかかわりの中で豊かな心をはぐくむことをねらい、次の仮説を設定した。

仮説１　生徒の心に残る感動のある道徳の授業を展開すれば、道徳的実践力を育てることができるであろう。

仮説２　主体的に取り組める特別活動を工夫すれば、道徳的実践力を育てられるであろう。

仮説３　思考力、判断力を高め、個が生きる授業を展開すれば、道徳的判断力を育て、道徳的実践力を育成できるであろう。

仮説４　美しい環境作りを進めることにより、働く喜びや思いやりの心が育ち、美しい心を培うことができるであろう。

仮説５　学校行事、奉仕活動、道徳資料等をとおして学校・家庭・地域における情報・体験の共有化が図られれば、家庭・地域の教育力が高まり、豊かな心が深められるであろう。

2　研究内容の四つの特色

紙面の都合で、仮説を統合し、研究内容を４点にしぼって述べたい。

第一は、シンボルの設定である。道徳の時間や実践活動で学習した諸価値が、個人の内面において有機的に結び付いたとき、人間としての生き方の自覚が深まるものと考えた。

本校では、本市出身の山本有三が戦後の日本人の生き方として述べ、かつ有三自身の生き方を象徴している「竹」をシンボルとした。天を目指す向日性、柔軟性と忍耐、素直さ、協力性、節目の大切さ等が、山本有三の文によって、より内容豊かなものになっている。この「竹」に、学習した諸価値を収斂させるように試みた。

第二は、郷土資料の開発と活用である。郷土資料は生徒が先人の生き方を学び、郷土を愛する心を培うのみに終わらない。父母や地域の方々にとっても郷土を再認識させ、学校・家庭・地域が共通な資料で話し合う基盤を提供する。

開発した郷土資料は、山本有三の作品を含めると 12 点になる。それらに関する写真や参考資料は、あき教室を利用した「郷土資料室」に常時展示されている。なお、有三関係資料は特に充実させ、「有三コーナー」を設けてシンボルとの結び付きの強化を図った。

第三は、指導過程の柔軟性である。一つのパターンに固定しないで、「ねらい」や資料、学級の実態により指導過程を工夫することを基本に置いた。最終的には、「ねらい」と自我関与との関係で三つの類型にまとめ、生徒の心にひびく道徳授業の展開を容易にさせることを可能にした。

第四は、地域と結び付いた実践活動である。郷土資料の教材化をきっかけとして、栃木市を流れる巴波川や学区全体のクリーン作戦が考えられ、親と子が共に汗を流す活動へと発展した。

またクラブ活動で、巴波川を利用した舟運の歴史をさぐるため、栃木市から東京の勝鬨橋までの 120 キロ徒覇に挑戦するなど、自主的活動も展開された。

研究発表を終え、今、振り返ってみると、荒削りの点のみが目立つ。これからも皆様の指導・助言を得ながら研究を継続していきたい。

# 学習指導実験学校の研究概要報告

佐野市立北中学校長
星　野　三　良

本校は平成２・３年度にかけて県教委及び市教委から、学習指導実験学校の指定を受けた。

研究主題は、「新しい学習指導要領の趣旨を生かした教科指導の充実」である。副題として、「生徒一人ひとりが自ら考え自ら学ぶ能力の育成を図るにはどのようにすればよいか」のもとに研究実践に取り組んできた。

1　研究主題に設定について

設定にあたっては、今日的教育課題、本校教育目標、生徒の実態の３点から考えた。まず、今日的教育課題からは、中学校学習指導要領改訂の基本方針、特に学校教育を進めるうえで「自ら学ぶ意欲と社会の変化に主体的に対応できる能力の育成を図るとともに、基礎的・基本的な内容の指導を徹底し、個性を生かす教育の充実に努めること」が学校教育に課せられた重要課題であると考えた。第２に、本校教育目標の「自ら学ぶ生徒」、努力点の「学習指導の改善充実」を達成するためにも、中学校学習指導要領改訂の基本方針を踏まえ、全教科にわたって教科指導の充実・改善を図ることが必要であると考えた。第３として、生徒の実態からは、学習面で「自ら学ぶ意欲・態度に乏しい」「学習活動が消極的」「表現力がやや乏しい」等がみられるため、基礎的・基本的な内容を重視した「教材観の確立」「教材の工夫と活用」「発問や学習形態の工夫」等を通して、主体的・意欲的に学ぶことのできる生徒の育成を図る必要があると考えた。

以上述べた三つの理由から本研究主題を設定した。さらに本校は、各教科ごとに研究課題を設け、解決にむけて実践してきた。紙面の都合上、全教科を挙げることはできないため３教科を挙げてみる。

○国語科…理解教材を通して、自分の考えを深め、的確に表現できる能力を育てる指導法の工夫
○美術科…表現活動に意欲をもち、主体的に取り組むための指導法の工夫
○英語科…聞く力を養い、コミュニケーション活動を活発にするための指導法の工夫

である。なお、学習指導を支える基盤的な内容として、学習・生活習慣の育成、学年・学級経営の工夫、学習環境構成についても研究実践をしてきた。

2　研究内容について

〈第１年次（平成２年度）〉

(1)　中学校学習指導要領の改訂の趣旨・理念を多面的な観点で探り、全教科について改訂の趣旨を生かした研究内容を明らかにする。

(2)　改訂の趣旨を生かすための研究の基本構想を明らかにする。
・全体にかかわる研究構想
・教科にかかわる研究構想

(3)　改訂の趣旨を生かした教科指導法の在り方について、授業実践を通して研究をする。

〈第２年次（平成３年度）〉

(1)　第２年次の研究成果の上に立って、生徒一人ひとりが自ら考え自ら学ぶ能力の育成のために、新しい学力観を確立し、生徒の側に立つ指導法を工夫し、「改訂の趣旨を生かした教科指導の充実」のための研究を推進する。

(2)　新教育課程編成にかかわる基礎的研究を進めるとともに、平成５年度からの新学習指導要領の完全実施に向けての教育課程編成の研究を推進する。

3　全体にかかわる研究、教科にかかわる研究
―（略）―

平成３年10月25日、公開研究発表会を開催し、９教科10クラスの授業及び研究発表を行うことができた。

県内から多数の先生方のご参加を得て、充実した研究大会になったことに感謝を申し上げ、報告とします。



地区だより

# 関ブロ大会に向けて

宇都宮・河内地区

本年度は、平成４年６月に予定されている「関東甲信越地区中学校長会第36回総会・第44回研究協議会栃木大会」に向けて、大会のもち方や組織運営に関する原案づくり、並びに研究協議題の趣旨及び研究の視点、全体会提案内容と発表方法についての検討と原案作成を主な活動内容として進めてきた。

このための組織として、本年度は研修部を新たに設置し、宇都宮地区４ブロック、河内地区２ブロックから各１名の研修部員を出し、６名の研修部員による研究推進委員会を設け、関ブロ関係の準備に当たってきた。

○４月12日　第１回宇河地区研修会
・宇河地区研修の進め方及び研究計画立案

○５月20日　研究推進委員会
・全体協議題の趣旨及び研究の視点、全体会提案内容についての検討と原案作成

○６月13日　第２回宇河地区研修会
・大会運営組織と推進について
・全体協議題の趣旨、研究の視点の検討

○７月15日　研究推進委員会
・全体会提案内容の項立て検討と資料収集

○８月26日　研究推進委員会
・前回の継続研究

○９月17日　研究推進委員会
・全体会提案内容の原案作成と発表方法の検討

○11月28日　県中学校長研究大会
・全体会提案内容の発表と協議

○12月13日　研究推進委員会
・県大会での提案内容・方法の反省と改善

# 生徒の自主性・自立性を育む学級経営の実践

上都賀地区

上都賀地区では、年次毎に研究主題を設定し、継続的に研修を進めている。特に、本地区では生徒数1,000人を超える大規模校もあれば、生徒数８人という極小規模校もある。また、商工業、観光・温泉、農山村と地域の特性も多様であり、教育課題も多岐である。しかし、それぞれの学校で共通に抱える学校経営上の課題は、なんと言っても“生徒指導”である。このようなことから、平成４年度本県で開催される関ブロ大会での地区としての提案に併せて、“生徒の自主的・自立的活動を育む学校経営の在り方”を目指して、32名の校長が、それぞれ研究の視点を設けて具体的に実践し、その成果を持ち寄り、研究討議を深めながら方策を明らかにしているところである。

以上の研修活動に加え、本地区では次の学校が今年度長期にわたる研究の成果を公開し、研究実践の交流を図ったところである。

○川俣中（栗山村教委指定　9/19発表）
地域の自然や文化に根ざし、心豊かに自己表現できるいきいき川俣っ子の育成

○西方中（文部省・西方村教委指定　10/15発表）
心豊かに明るくたくましく生きる生徒の育成－勤労生産学習を通して－

○大沢中（地区研修所・今市市教委指定　10/24発表）
道徳的価値の内面的自覚を深める指導法の工夫改善－豊かな心をもち、主体的に活動できる生徒の育成を目指して－

○北押原中（鹿沼市教委指定　10/28発表）
個が生き意欲的に取り組む学習の展開－基礎的・基本的内容の定着をめざして－

○南摩中（文部省・鹿沼市教委指定　11/14発表）
豊かな心をもって、進んで実践できる生徒の育成－奉仕等体験学習を通して－

○北犬飼中（鹿沼市教委指定　11/21発表）
自ら考え、自主的に活動する生徒の育成－学級での生徒の活動を中核にして－

## 研修活動の概要

栃木地区

栃木地区校長会の本年度の研修活動は、次の四つの柱に分けられる。

その１は、関東甲信越地区中学校長会栃木大会での栃木地区担当の第７分科会提案内容にかかわるものである。したがって、その研究協議題「創意と活力のある学校」の研究の視点「学校行事の改善による教育活動の活性化」をテーマとして研究に取り組んできた。そして、11月18日に栃木市小中学校長会で研究発表を行い、次いで11月28日の県中学校長研究大会で研究発表をしたものである。

その２は、小中学校長合同でのテーマ別研修で、「職員指導の具体例」「自由選択課題」の何れかをテーマに各自研究や実践を行い、それを発表し合い協議したものである。

その３は、講話等を聞いて教養を深める研修活動で、本年度は４回実施してきた。５月に、市教委学校教育課長鈴木功一氏の「学校教育の活性化を目指して」。８月に、茨城大学講師（前栃木市立栃木東中学校長）有澤弘一氏の「校長学雑感」。11月に、大宮南小学校長（前メダン日本人学校長）塩田栄氏の「世界の日本人学校の現状と課題」。そして12月には、高田育子氏の「琴の演奏」で、六段の調べや春の海等の名曲を鑑賞した。

その４は、県外先進校の視察である。６月に、群馬県甘楽町立第二中学校（石井信弘校長）を参観した。研修テーマは、「豊かな人間性と確かな学力を培う授業をめざして－望ましい学習態度の育成－」で、特に国際交流や感性教育について研修を深めることができた。11月には、香川県高松市立山田中学校（青山信校長）を参観した。研修テーマは、「自己を見つめ、たくましく生きる生徒の育成－生き生きと活動できる教育課程の実践－」で、道徳教育の資料開発と指導展開の工夫と、特別活動の自らの存在感を認識し、行動できる生徒の育成について学ぶことができた。

## 個性を生かす教育の推進

小山地区

平成３年度の小山市校長会中学校部会（11校）は、津釜和夫校長（小山三中）を会長として、各校相互の実践成果を交換しあい、校長としての使命に徹して主体的・創造的な学校運営に資し、さらに地域社会と時代の要請を考慮して活力ある運営に努めることを基本方針とした市校長会の全体研修（小中38校）の研究主題「豊かな心をもち、たくましく生きる児童生徒の育成を目指す学校経営」を受け、中学校部会では『個性を生かす教育を推進する学校経営』を研究テーマとして活動をすすめた。

研究は、前年度のテーマである"新教育課程への準備と学校経営"を基盤にし、次の諸課題について研修をおこなった。

(1)　個性を生かす教育の視点から、学習内容や学習方法の構造的な把握
(2)　個に応ずる、個を伸ばす教育の実践的研究
(3)　個性の多様化に応ずる学習指導の研究
(4)　行動を通して育てる教育の推進
(5)　多様性、創造性を育てる学校経営上の問題
(6)　新教育課程編成上の問題

これらの諸課題の検討を深めるにあたり、次の研修を重ねた。

(1)　全体研修……講話「個性を生かす学校経営」（講師　前宇・一条中校長　阿部豊先生）
(2)　実践発表……問題点を深め方向を求める研究協議のための素材提案
(3)　先進校視察研修……島根県出雲市立第一中学校（平成3,4年度文部省教育課程研究指定校、研究テーマ「個性を生かす教育」）
(4)　市教委および先輩校長との合同による学校経営教育調査……水戸市立常盤中学校
(5)　研修成果の発表……市小中校長会定例会議研修日に、小学校２名、中学校１名による発表。

## 研修活動の概要

下都賀地区

本会の研修は、毎月の学校経営を中心とする研修と県外教育事情調査による研修の２本立てで実施している。本年は次年度に控えた関東甲信越地区中学校長会研究協議会栃木大会の第１分科会で提案する内容を中心に研修し、県中学校長研究大会でのリハーサル発表にこぎ着けることができた。

以下、研究概要の一部を紹介し、研究報告とする。

1　研究の視点

改訂の趣旨を生かした新教育課程の編成と実践

2　研究主題

学ぶ喜びを感じ、いきいきと活動できる生徒の育成

3　新教育課程の編成と実践のための構想

本会は、学習指導要領の改訂に加えて、本県の教育運動（いきいき栃木っ子３あい運動）の内容を各学校の実態や条件等に合わせて取り上げ、それぞれにふさわしい特色ある教育課程の編成を進めることにした。そこで具体的な三つの実践事例を紹介し、教育課程編成・実践に寄与することにした。

＜実践事例１＞

「基礎的基本的な内容を重視し、個性を生かした教育の推進」を重視した教育課程の編成と実践

＜実践事例２＞

「人権尊重の教育を充実しながら、仲間づくりを図るにはどうしたらよいか」

＜実践事例３＞

「学校・家庭・地域社会相互の緊密な連携を図る教育の推進」を重視した教育課程の編成と実践－伝統芸能技術の継承－

4　校長の果たす役割

新教育課程を編成・実践するに当って、校長としては新学習指導要領の趣旨に沿うように努めるとともに、そのための条件整備にも当らなければならない。このような中で夢と理想をいかに実現させるか、極めて難しい立場に立たされている。ここに校長の積極的なリーダーシップが求められる。

## 本年度の研修活動の歩み

那須地区

本年度の第１回那須地区中学校長研修会は、平成３年４月５日㈮に新会員を迎えて開催された。その席ではまず組織づくりが行われ、次いで研修目標、研修内容等が熱心な討議を経て、決定の運びとなった。それからおよそ10か月経過したが、その間の歩みを２点にしぼり報告したい。

1　研究主題「生徒の内面に根ざした道徳性を育てる指導の在り方」について

本地区は、平成４年６月に開催される関東甲信越地区中学校長会栃木大会第３分科会の提案地区であることから、研究主題を分科会の協議題と同一にし、平成２年度から討議を重ねてきた。本年度も６月、８月、９月、11月の４回にわたり討議を行い、ようやくまとめの段階にこぎつけることができた。ここに到るまでには、研究の推進役となった高瀬敏通研修部長の努力もさることながら、各会員の協力もあずかって力があった。

2　当面する課題の解決について

上記の研究のほかに、当面の課題である選択履習の幅の拡大と学校週５日制も大きな研修内容であった。

まず選択教科の問題については、教員の定数増が望めない現状をふまえ、どの程度まで拡大を図ることが可能なのか。８月の研修会では、全校長がそれぞれの素案を持ち寄って意見交換を行った。特に結論めいたものは出なかったが、平成５年度の全面実施に向けて、各学校とも準備は着々と整えられつつあるようであった。

学校週５日制については、現在のところ平成４年９月から月１回実施されるということがわかっているだけで、特に資料がないままの意見交換に終始したが、週時間割の作成方法、学校行事の精選に話題が集中した。

このように本年度も前年度におとらぬ成果を収めることができたが、今後の研修にまつ内容も多く、会員一同気持ちを新たにしている。

## ヨーロッパ紀行　―文部省教員海外研修―

真岡市立中村中学校長　軽　部　　亨

10月15日（火）に飛び立った我々海外派遣第92団は、予定どおり16日にアムステルダムに着いた。乗り換えてウィーンに着き、市内を観光し、ベルベデーレ宮殿やプラター公園の「第三の男」の観覧車、国連ビルを見ることができた。ドナウの流れそのままに、ゆったりとした人々と美しい歴史の流れに接することができて幸せであった。このあと、バスは一路クラーゲンフルトを目指して走って行った。

森と湖の国、オーストリアはすべてが清楚で美しい。ウィーンもクラーゲンフルトも人口こそ違うが同様な雰囲気をもっていた。至る所に栃の木が繁り、濃い褐色の実を落としていた。

人口7万ほどのクラーゲンフルトで、市の教育委員会やフェストゥング小学校、ハーズナー中学校、障害児学校、ギムナジウムメッシンガーストラーセ中・高等学校、及びレアアンシュタルト技術高等学校などを訪問視察することができた。

まじめで、しかも愛くるしい子供達に囲まれて視察の喜びに浸ることができた。しかし、この国の大きな課題は「職場の開拓」にあることを知った。日本とは反対に、就職難の課題に学校が苦労していた。いかに優れた職業人にするかに教育が全力をあげていた。そのために、すでに小学校4年からコース別の履修体制が整備され、学力別指導が徹底していた。この市では、職業学校への進学を目的とするコースには43％、残りの57％はギムナジウム（進学コース）となっていた。そのコース選択の決定には、親と教師との話合いが納得するまで実施されるとか。

週休2日の児童生徒の過ごし方については、学校を開放してのスポーツや音楽活動などのプログラムもあるが、参加者は少ないようであった。家庭や地域での過ごし方については、学校としては詳しい把握はしていなかった。

さて、空缶もごみもごみステーションも見当たらなかったオーストリアから、イタリアのベニスへはバスの旅であった。国道ではおびただしい兵士に遇った。山ひとつ向こうのユーゴスラビアでは内戦となっているからだそうだ。

ベニスでは2日間過ごしてローマへやってきた。

クイリナーレホテルを拠点にして、気の遠くなるほど豊富な遺跡の中で3日間を過ごした。サンピエトロ寺院やバチカン美術館、トレビの泉、円形闘牛場、凱旋門等々。

ローマから南フランスのニームへ飛来し、コンコルドホテルをベースキャンプにして、ガール県教育委員会、教材センター及び進路指導情報センター、キャプシネー中学校、アンドガレン幼・小学校、モントリー高等学校、デュオダ工業高等学校と見せていただいた。

児童生徒は明るく生き生きとしていた。何よりも学習への取り組みが真剣であった。

幼稚園では「おやつの時間」に、フランスパンならぬ「ゆでた栗」を与えていた。経済的理由か栄養上の配慮かは分からないが、ふと、我が戦時中の小学校時代の遠足を思い出してしまった。

工業高校は、すべて実社会・企業と密接に結びついて技術者の養成がされていた。学校が企業人の研修と実習の場となっていることにも感銘を受けた。生徒5～6人に教官が1名ついていた。徹底した個別指導に感心させられた。しかし、ここでのコンピュータの大半は日本製であり、我々が日本からの客であることを知った生徒は、急に愛想よく「ホンダ」「トヨタ」を連発した。改めて日本企業の強さを実感してしまった。

中学も、高等学校も、校庭にはタバコの吸いがらが散乱していたのが心に焼きついた。

ニームを後にして訪れたパリは至る所に空缶が捨てられ、ごみが山となっていた。

パリの公園で見かけたひったくり、建物への落書き、すさまじい爆音をたてる若者のオートバイに何か日本との共通点を視察してしまった。

この16日間の貴重な体験を学校経営に生かしたい。